

## 生き物のすみか



家族や仲間の絆…  
共に舞い、鳴く

# 「タンチョウ」

日本動物科学研究所所長  
今泉忠明監修「タンチョウ」

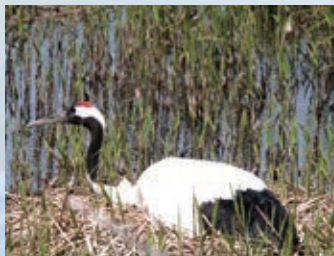
翼を広げると230cm前後にもなる日本最大級の鳥、タンチョウの子育ては1年におよびます。その舞台は北海道東部(道東)の広大な湿原や牧草地です。1~7kmの縄張りに、枯れたヨシなどを積み上げた直径1~2mの大きな巣を作り、4月から5月にかけて卵を産みます。この地域では、春といっても雪が降ったり大雨で増水したりすることもあり、もしも、水に浸かり続けてしまったら卵が孵ることはありません。

オスとメスが交替で温め続けること、ひと月あまり。水害を免れた巣ではヒナが誕生し、つがいはわが子との対面を喜ぶかのように鳴き合います。タンチョウは求愛・威嚇・警戒など様々な場面に、よく通る大きな声で鳴いて互いに感情を伝え、求愛ではダンスのような行動もみせます。共に舞い、鳴きかわすことで絆を深めるのです。

タンチョウの家族は、ヒナの孵化後わずか数日で巣を離れ、小魚や昆虫などの食べものを探しながら、移動する生活を始めます。日が暮れても巣に戻ることはなく、休むときにはおんぶのような格好で翼の中にヒナを入れ、寒さや外敵から守ります。



タンチョウのダンス



抱卵の様子



釧路湿原

生まれたばかりのヒナは13cmほど。歩幅の大きな親に遅れまいと懸命ですが、足元はおぼつきません。まだ弱々しいヒナを天敵から守るため、食べものを探す間も一方の親鳥が残り、ヒナを狙う相手が大きなオジロワシであってもひるまずに追い払います。それでも、1年後まで生きられるヒナは3羽に1羽というほど厳しい環境です。

親鳥に守られて成長したヒナは、初夏には羽ばたきの練習を始め、たくましくなった脚で助走をつけて、ふわりと浮き上がります。だんだん長い距離を飛べるようになり、冬には湧水によって凍らない川へ移動します。

道東の冬は厳しく、マイナス20℃になる日も珍しくありません。そんな2月の中頃、少し前まで優しくなっていた親鳥が急に子どもを突き放すようになります。子別れの儀式です。子どもはおびえ戸惑いますが、やがてあきらめると若鳥の群れに加わります。



タンチョウの子育て



翼の中でヒナを守る親鳥

すると、1年前に生まれた若鳥が、親鳥に代わって食べ物をあげたり危険を知らせたりと面倒を見るようになり、親鳥たちはつぎの繁殖のために湿原に帰っていきます。

かつて生息地の開発や乱獲により絶滅寸前に追い込まれたタンチョウは、1950年代に始まった冬の給餌などの保護活動により約1,800羽にまで増えました。ただ、安心できる数ではなく、わずかに残る繁殖地が過密になったことから人の生活圏へ進出し、感電や事故など別の災難にも巻き込まれています。

これからは、タンチョウが厳しい環境を生き抜いていくと同時に、私たち人間と共生できる道を探していくことが、重要になってくるでしょう。そしてそれは、私たちが助けあいの心を持って考えていけば、きっと道は見えてくるはずです。

タンチョウの夫婦が舞うことで愛情を確かめ、家族で鳴きかわして喜びや厳しさを伝えて絆を深める姿、仲間が力を合わせて厳しい自然の中を生き抜いていく姿から、一人では乗り越えられない困難でも家族や仲間と助けあうことで乗り越えられる強さを感じることが出来ます。

2020年は、日本だけでなく世界中で新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大により、私たちがあたり前のように過ごしてきた様々な日常生活を見直すことになりました。誰にとっても大切でかけがえのない毎日を守るためには、できることを続けながら、未来を作るしかありません。一人一人が身の回りを整え、自分や自分の周りの人を守るために、考え、備えていくことが、私たちが残していく未来になります。

県民共済の新型火災共済・生命共済は、毎日の暮らしに起きるかもしれないリスクを想定した保障内容です。どうか一人でも多くの方が備えることを考えるきっかけになりますように。